

## 序論

### 第一節 研究動機

森鷗外の「阿部一族」<sup>1</sup>を読み、作中における鮮明な武士像に心が引かれた。とりわけ主君細川忠利と臣下阿部彌一右衛門の武士像はもっとも興味深いものである。作中に忠利は「彌一右衛門の言ふことを聴かぬ癖が附いてゐる」<sup>2</sup> (P.327) という個人の好悪で彌一右衛門のことに反対したがる主君として描写されている一方、彌一右衛門は「意地ばかりで奉公して行く」 (P.327) という個人の主張で忠利に仕える臣下として描かれている。そして、忠利は病気に罹り、死が近い状態であっても、彌一右衛門に殉死許可を与えずに死んでしまったのである。殉死許可が貰えなかった彌一右衛門は、忠利が死んだ後、主命に服従して生きたが、家中に批判され、最後に追腹をしてしまったのである。

ルース・ベネディクトは『菊と刀』において、「重大な伝統的な『義理』関係は、武士の主君及び同僚に対する関係である。それは名誉を生命とする人間が、彼の長上ならびに彼と階級を同じくする同輩に対して負う忠節である」<sup>3</sup>と指摘し、「『義理を知る』ということは、生涯主君に忠節を尽くすということであった。そして主君はその代わりに家来の面倒をみた。『義理を返す』ということは、なにもかも一切世話になっている主君に、命をも捧げるということであった」<sup>4</sup>と君臣関係における「義理」関係を説明したのである。しかし、ルース・ベネディクトが指摘した君臣関係における「義理」関係の視点から見れば、忠利と彌一右衛門の行為を解明し切れないのである。たとえば、彌一右衛門は武士の義理を知った上で、主君の忠利の恩を報いるために、殉死要請を申し出たが、忠利に断われたのである。主君としての忠利が義理を知るはずなのに、臣下の殉死要請を断ったという行為は、ルース・ベネディクトが指摘した武士の規範に相応しくないのである。一方、新渡戸稲造は『武士道』において、「武士は支配階級の一員として、身につける名誉と特権

<sup>1</sup>『中央公論』(1913・1)に初出、『意地』(靑山書店、1913・6)に改稿、のちに『鷗外全集』第11巻(岩波書店、1972)所収

<sup>2</sup>テキストの『鷗外全集』の原文のまま取り上げているため、ページ数と括弧を付け加える。以下も同様である。

<sup>3</sup>ルース・ベネディクト著・長谷川松治 訳(2005)『菊と刀 日本文化の型』講談社 P.170(本書は1972年、社会思想社刊行された『定訳菊と刀』と底本としている。)

<sup>4</sup>ルース・ベネディクト著・長谷川松治 訳(2005)『菊と刀 日本文化の型』講談社 P.172(本書は1972年、社会思想社刊行された『定訳菊と刀』と底本としている。)

が大きくなるに従い、それらにともなう責任や義務も重くなってきた」<sup>5</sup>と指摘した。このように、武士は行動をする前に、武士としての責任や義務を意識した上で、行動するはずである。彌一右衛門は確かに、武士の身分に伴う責任や義務の面を意識し、恩を報いたために、殉死要請を申し出、主命に服従して生き残った。だが、彌一右衛門は主君がいたときに、主命に服従することができたが、主君がいなくなったから、勝手に追腹してしまった。彌一右衛門の行為から見れば、新渡戸稲造が指摘した武士道にある武士の責任や義務との矛盾があるのである。一般的に、武士は武士なりの倫理道徳を守るはず義務べきである。鷗外が描いた独特の武士像とは何であろうか。

「阿部一族」は1913年1月『中央公論』に掲載された後、「興津彌五右衛門の遺書」<sup>6</sup>と「佐橋甚五郎」<sup>7</sup>と共に同年6月初山書店に出版された『意地』<sup>8</sup>と題する鷗外の第一歴史小説集に収録されたのである。一般的に、同じ作品集に収められた作品に、きっと何か共通点があると思われるのである。『意地』という作品集においても、きっと何か共通点があるに違いない。それで、『意地』三部作の共通点を究明するために、最も興味があった武士像を皮切りとして、『意地』に描かれた武士世界を考察する。「阿部一族」には、前述した忠利と彌一右衛門の結末を引き続き、阿部家の遺族は細川家の家督となった新主君の光尚の処分に対する不満をもち、個人の主張を表明したので、ついに討手を招き、全族が滅された。「興津彌五右衛門の遺書」には、主人公興津彌五右衛門は主君三齋公の格別な対応をもらい、主君が亡くなった三年忌に、当代の主君細川光尚から殉死許可を貰って殉死したのである。「佐橋甚五郎」には、主人公佐橋甚五郎は、自分の命を救うために、主君徳川家康の助命条件として甘利を殺すことを果たしたのである。しかし、佐橋甚五郎の殺人手段が家康に認められなかったので、冷たい態度で対応された。ある日家康と家中の対話内容により、家康が自分に対する批判を知った上、何も言わずに、家康を離れて、逃亡してしまった。最後に、朝鮮の使者となって、26年ぶりに徳川家康の目前に現れるという結末となる。よって、単に武士の倫理道徳という視点から、『意地』三部作における武士像を解釈するならば、

<sup>5</sup>新渡戸稲造著（2003）『武士道』岬龍一郎訳 PHP 研究所 P.21

<sup>6</sup>『中央公論』（1912・11）に初出、『意地』（初山書店、1913・6）に改稿、のちに『鷗外全集』第10巻（岩波書店、1972）所収

<sup>7</sup>『中央公論』（1913・4）に初出、『意地』（初山書店、1913・6）に収録、のちに『鷗外全集』第11巻（岩波書店、1972）所収

<sup>8</sup>森鷗外（1913・6）『意地』初山書店

解明し切れないところがある。それで、ほかの視点から『意地』における三部作の武士像を究明する必要がある。

『意地』三部作における主人公の結末は、主君と大きな関わりがあるように見られる。なぜならば、それは武士が主君か臣下としても、やはり感情的な存在なので、人と人の付き合いにより、さまざまな感情が生じ、個人の行動や行為に影響を与えるからである。それに、武士は上下関係が重視される社会で生きているものなので、権力支配権を握る主君は、臣下を支配することができ、臣下は主君の命令に服従するべきである。つまり、『意地』三部作における君臣関係には、感情と権力支配という支配関係が存在している。そして、『意地』三部作における武士像は、このような感情と権力支配が含まれた支配関係に沿って形成されるのである。いわゆる、君臣関係の支配関係に潜んでいる武士の感情は、武士像の形成要因である。君臣関係の支配関係に潜んでいる武士の感情が行動に移った結果によると、『意地』三部作における主君像と臣下像が見られるのである。従って、『意地』三部作における武士像を客観的に究明しようとするならば、君臣の支配関係という視点から考察するべきと思われる。

そこで、本論文は、鷗外の第一歴史小説集『意地』における三部作を研究対象として取り上げ、君臣関係における支配関係を中心に、鷗外が描いた武士像を考察する。この考察を通して、『意地』三部作の君臣関係の支配関係に潜んでいる武士の感情や意志を究明する一方、鷗外が初期歴史小説において、第一歴史小説集『意地』における武士像を明らかにする。

## 第二節 先行研究

### 2.1 『意地』

『意地』は鷗外の第一歴史小説集である。鷗外は歴史小説を書き始める前に、現代小説を中心に創作した。鷗外が現代小説の創作をやめて、歴史小説を書き始める理由については、高橋義孝の説は積極的な理由と消極的な理由という二つの対立な視点から、次のように述べている。(以下すべての下線部分は論者によるもの。)

積極的な理由は(理由はいつでも積極的なのだが)、明治帝の崩御、ならびにそれに続く乃木大将夫妻の殉死である。この二つの事件は、鷗外の中に半ばまどろんでいた封建武士の気質を揺り起し、めざましめた。この武士の血が現代ものを棄てて、過去の、封建制下の社会に生きた人間の世界へと鷗外の首をねじまけたのである。

消極的な理由は(理由はいつでも消極的なのだが)、かねて自覚していた自己の「創造力の不足」(『杉原品』大正五年一月)を、特に『灰燼』の稿を続いでいるうちにますますはっきりと認めざるを得なくなる一方では、過去の歴史世界に縋ってものを書いていくという、「現代もの」が要求するような「創造力」なしでも可能な制作態度を、自分の中に今あらためて目覚めてきた古い血の助けと相俟って採るようになったということに求められるであろう<sup>9</sup>。

このように、鷗外が歴史小説を書き始めた理由が明治天皇の崩御と乃木大将夫妻の殉死事件という歴史的事実を基にして、自身の創造力を働かせ、歴史小説を書き始めたのである。いわば、鷗外が歴史小説を書き始めるきっかけは、自身が意識した創造力の不足と外界の起こった事件に影響されるのである。鷗外の日記では、乃木希典の殉死事件が記され、その後、一連の歴史小説の創作記録が見られる。そこで、鷗外の日記を見てみよう。

大正元年

9月13日(金) (前略) 午後二時青山を出でて歸る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり、予半信半疑す。

<sup>9</sup>高橋義孝(1967) 作家と作品『日本文学全集 4 森鷗外(一)』集英社 P.432

9月15日(日) (前略) 午後乃木の納棺式に蒞む。(以下略)  
9月18日(水) (前略) 乃木大将希典の葬を送りて青山齋場に

至る。興津與<sup>ママ</sup>五右衛門を艸して中央公論に寄す。

11月29日(金) 阿部一族脱藁す。  
12月22日(日) 興津の子孫の事に就きて賀古鶴所と往復す。

大正二年

3月9日(日) 佐橋甚五郎を艸し畢る。  
4月3日(木) 夕より興津彌五右衛門に関する史料を整理す。  
4月6日(日) 阿部一族等殉死小説を整理す。  
4月8日(火) 植竹喜四郎に軼事篇の原稿をわたす。  
4月9日(水) 植竹喜四郎が来て請へるより、軼事篇を意地と改む<sup>10</sup>。

鷗外の日記によると、鷗外が乃木の殉死事件から、「興津彌五右衛門の遺書」という歴史小説を皮切りとして、一気に「阿部一族」、「佐橋甚五郎」を創作した流れが見られる。そして、鷗外の日記には、「興津彌五右衛門の遺書」、「阿部一族」に関連する史料の整理などの作業を記録し、鷗外が書店の要請で、本来『軼事篇』と命名した第一歴史小説の題名を『意地』に改めたことも書いてある。題名と作品の内容に関連性があるので、触れておく必要があると思う。そこで、『意地』という題名と作品の内容の関連性については、大野健二が次のように指摘した。

『意地』という題名は、定本『興津彌五右衛門の遺書』と、『阿部一族』に共通する殉死観と、一緒に収められた『佐橋甚五郎』と内在する、近世武士の体面保持や対抗意識や抵抗感など、強烈な自我の主張を、的確に取られたものであり、そのような統一した主題の中に収められるにふさわしいものとして、定本『興津彌五右衛門の遺書』は、初稿本とは全く異質の作品として、しかも『阿部一族』とは同質の作品として登場したはずのものである<sup>11</sup>。

このように、「内在する、近世武士の体面保持や対抗意識や抵抗感など、強烈な自我の主張」という『意地』三部作の共通点は「意地」の意

<sup>10</sup>森鷗外(1974)『鷗外全集』第35巻 岩波書店 PP.568-591

<sup>11</sup>大野健二(1959)「森鷗外『殉死小説』の研究」『国語国文学』名古屋大学国語国文学会 P.61

味に相応しいものなので、「意地」と名づけられたのである。そして、清田文武は「意地」という言葉の意味を次のように説明している。

意地とは、体面を意識し、これを守り通そうとする心、あるいは自分の思いことを貫こうとする心的態度であるから、それが通らないときは抵抗的な姿勢をとることにもなるであろう<sup>12</sup>。

以上の引用によると、「意地」とは、体面を意識して、人間の行動を支配する心的態度であることが分かった。そして、この心的態度は、直面する問題を通せるかどうかによって、前向きか抵抗する行動に変わるものである。つまり、清田文武が説明した「意地」の意味と大野健二が指摘した「自我の主張」とほぼ同じものだと考えられる。さらに、清田文武は『意地』における武士像については、次のように指摘した。

歴史小説集『意地』の世界における人物は、主君への報謝の念から自己を否定し献身的に仕える武士や、これと対照的に、自己の存在を主張しつつ潔い自らの道に殉ずる者が多い。しかし、そういう彼らには、置かれた状況の中で、武士としての倫理・道徳を守り保持しようとする意地的な姿勢が共通している<sup>13</sup>。

引用のように、『意地』における武士像には「武士としての倫理・道徳を守り保持しようとする」態度で行動を取るという共通点がある。そして、大野健二と清田文武の論述を合わせると、『意地』における武士像は、自我の主張と武士としての倫理・道徳という共通の要素が含まれていることが分かった。それで、『意地』三部作における武士像を解明するならば、「自我の主張」と「武士としての倫理・道徳」という二つの研究方向に進むことが必要である。そこで、まず、武士としての倫理・道徳意識という視点から、『意地』三部作に描かれた武士像を見てみよう。

## 2.2 『意地』における武士の倫理・道徳意識

「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」は共に細川藩に起こった殉

<sup>12</sup>清田文武（1970）「鷗外の歴史小説における人間像の形成－「待つ」「耐える」という契機を中心に－」『文藝研究』第64集 日本文芸研究会 PP.20-21

<sup>13</sup>清田文武（1970）「鷗外の歴史小説における人間像の形成－「待つ」「耐える」という契機を中心に－」『文藝研究』第64集 日本文芸研究会 P.21

死事件を取り上げた作品である。それで、その中の一つの作品を中心に論じる時に、ほかの一つの作品を含めて考察すれば、主題や内容などはもっと明らかになる。従って、『意地』における武士の倫理・道徳意識を考察する前に、この二作についての評価を見てみよう。

「興津彌五右衛門の遺書」において殉死の讃歌をこころみた鷗外は、「阿部一族」では殉死そのものに對する人間的、心理的批判を加えたことは既に指摘した。前者に於ける肯定的・調和的な詩は、後者では懐疑的・批判的に心理の深淵を見つめる理智的な凝視に變っている<sup>14</sup>。

このように、長谷川泉は「興津彌五右衛門の遺書」を「肯定的・調和的な詩」という評価をしたが、「阿部一族」には「懐疑的・批判的な心理の深淵」という評判を与えたのである。従って、「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」は殉死を中心に描かれた作品であっても、殉死そのものに対して、著しい相違があるのである。そこで、長谷川泉が「興津彌五右衛門の遺書」に「肯定的・調和的な詩」という評価をつけた理由を次のように見てみよう。

規則と拘束とにみちみちた徳川封建社会にあって、抑壓されていた人間性が、封建社会の要求する生活行動の方式にそのまま合致する調和的な人間心理がこの作品では何等の矛盾なく眺められている<sup>15</sup>。

このように、長谷川泉は人間性の視点から、「興津彌五右衛門の遺書」の作品内容を評価をつけた。それは、「興津彌五右衛門の遺書」における武士は徳川封建社会という枠を優先的に意識し、自分の意念や主張を抑え、封建体制の要求に合わせた行動を取るなのである。つまり、長谷川泉はこの作品では、本来の人間性を抑え、社会の秩序に合わせるために行動を取る武士像が読み取られたので、肯定的な評価を与えたのである。それに対して、長谷川泉は同じ殉死小説である「阿部一族」に違った評価

<sup>14</sup>長谷川泉（1951）『『歴史其儘』と『歴史離れ』－歴史小説としての作品『阿部一族』』『文学』第19巻第5号 岩波書店 P.436

<sup>15</sup>長谷川泉（1951）『『歴史其儘』と『歴史離れ』－歴史小説としての作品『阿部一族』』『文学』第19巻第5号 岩波書店 P.430

が与えられた理由は次の引用を見れば分かる。

作品「阿部一族」は殉死という一つのアクトを斫断の截線として、封建社会における人間性が、冷酷無慙な局外者（家中）の凝視によって、いかにむざむざと心魂のからくりをあげ渡さざるを得なかったかの、心象風景の横断面を露出した作品であった。絶対ならぬ「絶対」や、名聞に歪曲され、心理的奴隷となって破滅してゆく人間性の慟哭を描いていた<sup>16</sup>。

引用のように、「阿部一族」における人間性が、殉死という行動を切断の截線として、「冷酷無慙な局外者」と「絶対ならぬ『絶対』や、名聞に歪曲される」という周囲の人々や環境から与えられた不条理な条件で支配されるのである。要するに、「阿部一族」には、「興津彌五右衛門の遺書」のような封建社会に合致する人間性が見られず、様々な不条理の外来要因で、本来の人間性が歪曲され、悲しい人間性が形成されることだけ見られる。従って、「興津彌五右衛門の遺書」における人間性は、武士が封建社会の要求に合致するように行動する。「阿部一族」における人間性は、単に封建制度の要求に合致することができず、いろいろな不条理な外来要因に支配されるのである。つまり、二作における差異性は、登場人物の設定に大きく関わるといえる。そして、尾形仿は「阿部一族」における武士の殉死行為について、次のように述べていた。

その一つは、封建時代における殉死は、個人の誠情ということとは別に、主君という絶対権力者によって認められたものでなければならなかったということ。逆にいえば、いかほど臣下の誠情があろうとも、権力者の許可を得たものでなければ、それは殉死としては認められなかったということである。もう一つは、それはつねにかならずしも乃木大将の場合のごとき献身の徳に貫かれた行為としてのみ存するものではなく、時に遺族の後栄への顧慮、そして最も多く封建武士社会における「体面」という観念の支配を受けるものであったということ<sup>17</sup>。

<sup>16</sup>長谷川泉（1951）『『歴史其儘』と『歴史離れ』－歴史小説としての作品『阿部一族』』『文学』第19巻第5号 岩波書店 P.441

<sup>17</sup>尾形仿（1962）「歴史小説の史料と方法－「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」－」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.48

このように、尾形仿は「阿部一族」にける武士の殉死観を説明したのである。封建社会にある権力者が絶対権力を持っているため、臣下が殉死したくても、まず、主君から殉死許可を貰わなければならないのである。一方、武士の殉死行為は、献身という武士の徳目である行動以外に、「体面」という名誉に関わる観念も支配されるのである。つまり、「阿部一族」における武士の殉死行為は、主君の権力支配及び武士自身が「体面」に対する意識という二点に影響されるのである。そこで、尾形仿は「阿部一族」における君臣関係の権力支配については、次のように述べている。

封建支配の確立された歴史的社会的環境の中で、権力者が自己の感情を正義にすり代えて個人に対したとき、また被支配者である個人が自己の存在を人間として対等に権力者の前に主張せんと試みたとき、ないし権力者と個人との信頼関係が断絶したとき、個人の生命は絶対権力の強大な壁の前に悲劇的な滅びの途を辿るよりないことを闡明したのである<sup>18</sup>。

このように、「阿部一族」における殉死の考察を通して、絶対権力と個我との対立関係を見出したのである。そして、尾形仿は「阿部一族」における権力者が握った権力支配の程度を説明し、権力者が絶対権力をもっているので、被支配者の個人の主張どころか、生命さえも権力者に支配されることを指摘した。従って、「阿部一族」と「興津彌五右衛門の遺書」と共に徳川時代の細川家に起こった殉死事件をめぐる作品であっても、「阿部一族」は「興津彌五右衛門の遺書」に描かれた極致な調和性がある武士像が見られず、支配権が権力者の方に斜めに傾く武士像が見られるのである。一方、尾形仿は「阿部一族」と「興津彌五右衛門の遺書」の二作を考察した上で、鷗外の第三作目の歴史小説「佐橋甚五郎」の創作動機を次のように指摘した。

「興津」「阿部」の二作を通じて、封建社会における君臣関係の極点を示すべき殉死という行為を、肯定・否定の両面から考察した鷗外にとって、次に残された問題は、溯って、忠義だの義理だの体面だのという固定観念が個々人の行動を束縛規制する以前、封建支配

<sup>18</sup>尾形仿（1962）「歴史小説の史料と方法－「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」－」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.48

成立の胎動期における君臣関係の相剋を究明することでなければならぬ<sup>19</sup>。

このように、尾形侑は鷗外が「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」における武士の殉死行為を通し、肯定と否定の両面から、君臣関係にあった絶対権力と個人の関係を見出した。その一方、封建武士としての倫理・道徳観念を脱出して、戦国における君臣関係の相剋を中心に描写される「佐橋甚五郎」を創作した因果関係をも推測したのである。「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」は江戸初期で、「佐橋甚五郎」は戦国時代を中心に描かれた歴史小説である。もし、単に封建武士としての倫理・道徳意識という視点から、作中に於ける武士像を論じるなら、不十分なことになると思う。そして、池内健次は封建武士としての倫理・道徳意識という視点から『意地』三部作に於ける武士像を論じる時の困難点を次のように指摘した。

「興津彌五右衛門の遺書」が、なにか封建的道徳の賛美などの意図を蔵しているようにいわれたりもする。しかしそういう理解は、次の「阿部一族」でたちまち困難に逢着する。それも武士道をひろく封建的武士の生きさまとかいつて切り抜けたとしても、三番目の「佐橋甚五郎」はそれではまずい。封建武士だろうが外国への逃亡者だろうが、要するに同じ人間の意地、ということにならないだろうか<sup>20</sup>。

このように、『意地』三部作に於ける武士像は、その作品の発表順番に従って、新渡戸稲造やルース・ベネディクトが指摘した武士としての倫理・道徳から離れていく様子が見られるのである。とりわけ、「佐橋甚五郎」において、主人公佐橋甚五郎は日本の武士が外国への逃亡者となる行動は、武士としての倫理・道徳という視点から、解釈しきれないのである。そして、「佐橋甚五郎」における主人公の意地は「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」における主人公の意地とは異なったものと指摘されたのである。従って、『意地』三部作に於ける武士像は、共通の武士道徳がなく、共通の武士の意地もないのである。この原因については、

<sup>19</sup>尾形侑（1962）「歴史小説の史料と方法－「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」－」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.48

<sup>20</sup>池内健次（2001）『森鷗外と近代日本』ミネルヴァ書房 P.160

池内健次は次のように説明した。

歴史文学において鷗外が書こうとしているのは、もちろん人間である。教養小説の意図は鷗外から失われることはけっしてない。歴史文学が意図するのは、教養小説の意図を資料に依拠して叙実することを通して実現することである。作品化しようとするのは、殉死とか没我献身とか敵討ちとか封建道徳とか封建的人間の生き方とかではなく、端的に人間そのものである。具体的に個々の人間の行動や思想や生涯が、具体的なさまざまな条件によって成立していることはもちろんであり、その故に人間を叙述することはさまざまな条件を叙述することであるが、しかし鷗外の意図するところは、鷗外の歴史文学作品のモチーフは、端的に人間そのもの、つまり人間の生、性命である<sup>21</sup>。

池内健次が説明したことを見れば、鷗外が歴史文学において書こうとしているのは、封建道徳や封建制度という枠に生きている人間の生き方だけではなく、人間そのものであることがわかった。要するに、武士は武士という身分であっても、この世の中に生きている人間であるため、その行動や行為も自分の感情や思想、あるいは外来の人物や物事に影響されるものである。それで、鷗外が描いた武士像を究明するならば、武士の人間性という視点から、武士の行動・行為を考察してみる必要があると思う。さらに、今までの分析したことを通して、単に武士の道徳という視点から考察すれば、『意地』三部作における武士像は解明しきれない様子が見られるのである。従って、人間像という視点を皮切りとして、『意地』三部作における武士像を究明していく。

### 2.3 『意地』における人間性

人間性とは人間が生まれつきでそなえている本質である。そして、人間の行動・行為にこの人間性がよく見られるのである。そこで、成瀬正勝が人間性の視点から、『意地』三部作における武士の行為を論じたことを見てみよう。

「遺書」の主人公が殉死行為のなかで純粹であろうとも、これを

<sup>21</sup>池内健次（2001）『森鷗外と近代日本』ミネルヴァ書房 P.160

人間性の全般から見れば一種の偏執であることはいうまでもない。

「阿部一族」が主家に対して齒向わざるを得なかったのも、その主人公達の善意が酬いられなかったという不満を、その種の封建の偏執のなかに生かしたことにあるのである。(中略)「佐橋甚五郎」はその主君家康に裏切られて脱走するが、これとても今日に我々の間に見るようなレジスタンスの世界とは趣きを異にする。小姓甚五郎は他の小姓の違約のために相手を切り殺す。それは違約を武士的倫理として許容し得ないと見る彼の偏執であり、さらに再び家康に仕えるためには我が子のように可愛がってくれた主君の寝首をかき切ることを敢えてなし得るような異常性が有る<sup>22</sup>。

成瀬正勝が指摘したように、『意地』三部作における主人公の人間性は次の通りである。「遺書」の主人公の殉死したことは純粋な「偏執」であり、「阿部一族」の主人公達は主家に不満な偏執があり、「佐橋甚五郎」の主人公は武士としての倫理・道徳に偏執があるが、その所作が意識した倫理・道徳と矛盾があるのである。つまり、『意地』三部作における主人公達の行為には、「偏執」という人間性を含まれたのである。しかし、「偏執」という人間性の視点から、『意地』三部作における主人公達の行動・行為を解釈することができるかもしれないが、君臣関係の支配関係に潜んでいる感情を解明することができないと思う。それは、君臣関係において、主人公は「偏執」的な人間性があるといっても、主君の所為に影響されないわけではない。さらに、主君が権力支配を握る権力者なので、主人公達はどのような「偏執」的な人間性であっても、個人の生命が主君に支配されるものである。

## 2.4 『意地』三部作の特色

鷗外の歴史小説における武士像の特色について、清田文武は次のように指摘した。

鷗外の歴史小説においては、その人間像の形成に、「待つ」「耐える」という契機の与えていることが指摘できる。いわゆる歴史そのままの作品においては、既成の価値を守り、これを持続しようとするために待ち、耐える武士が中心に描かれている。彼らはそのため

<sup>22</sup>成瀬正勝(1956)「鷗外の歴史小説・伝記物について」『国文学』十月号 第1巻第4号 学燈社 P.13

積極的・能動的に行動し、また抵抗的な姿勢を示す場合がある（中略）「阿部一族」を例にとれば、彼らは待つというよりは耐え忍んでいる人物として捉えられるが、それは、待つというような前途に対する姿勢ではなく、そのまま耐えきろうとする態度なのである。したがって、待つということは、耐える態度より積極的・能動的な意味が濃いとさえないであろうか。待つことは耐える精神踏まえて可能なのだと思われる<sup>23</sup>。

このように、鷗外の歴史小説における人間像の形成は、「待つ」「耐える」という契機が与えられたのである。そして、武士は本来の価値を守り、場合によって、「待つ」「耐える」という行為を基にし、積極的・能動的な態度やたまに抵抗的な姿勢な態度で行動を取るなのである。つまり、武士は周囲の環境を観察し、個人の意志で行動を取る人間像である。そして、鷗外の歴史小説作品の特色について、木村一信は次のように論及した。

『遺書』にはじまる鷗外の「歴史小説」の根底に流れるテーマと関連を有する問題なのである。「遺書」はともかくとしても、「阿部一族」から「佐橋甚五郎」「護持院原の敵討」「大塩平八郎」へと続く作品、即ち大正2年から3年にかけて創作された作品（歴史小説ではない作品として「槌一下」がある）には、共通して「対立」というテーマを見出すことができるのである。（中略）鷗外は、歴史の中に人間の対立を発見し、自らの思いを史料に埋没させることによって対立の彼方にあるであろう人間の真実の姿を求めていく。個人の意識とは、そうした「対立」を生み出す基なのである。そしてまた、対立のまえにあって人間を支える唯一の基盤である<sup>24</sup>。

このように、木村一信が鷗外の歴史小説から「対立」というテーマを見出した一方、その「対立」は、個人の意識から生み出されたものだと指摘したのである。いわば、鷗外の歴史小説における「対立」を生み出す基は個人の意識である。従って、鷗外が描かれた武士像には、個人の

<sup>23</sup>清田文武（1970）「鷗外の歴史小説における人間像の形成－「待つ」「耐える」という契機を中心に－」『文藝研究』第64集 日本文芸研究会 P.28

<sup>24</sup>木村一信（1973）「『阿部一族』の世界－一つの視点」『日本文芸研究』第25巻第4号 関西学院大学日本文学会 PP.46-47

意識という重要なポイントがあるのである。さらに、藤本千鶴子が「鷗外における共同体と個」という対立な観点から、『意地』三部作の構造を論じた論文を見て見よう。

「古言は宝である。」という、古言の命である。「恩」という一語の中に、降り積む負債感の重荷を必死に返す、昔の人たちの律義さを見た。人を肅然とさせる品位を発見した。「恩」と「礼」、「気」と「意地」、「情」と「義」、「恥」、「誓言」、「道理」などなど。それをのちに、「歴史の自然」とも呼びかえるのである。鷗外としては、古言の中にこそ、神話や伝説か明治・大正の重大事件にまで通底する、日本文化の核があって、それを捉えた歴史小説集を世に問うつもりだったのである<sup>25</sup>。

このように、藤本千鶴子は鷗外が「『恩』、と『礼』、『気』と『意地』、『情』と『義』、『恥』、『誓言』、『道理』など」という日本文化の内部にあったものを第一歴史小説集『意地』に入れ込まれた事を指摘したのである。そして、藤本千鶴子が指摘した『意地』の構造の特徴には、武士としての倫理・道徳があり、人間なりの情もあるのである。確かに、『意地』における武士像はこの様な特色があるといえる。

管見によると、いままでの論説においては、各論者がそれぞれの認識した武士の道徳意識や単一の人物像という視点から、『意地』三部作における武士像を論じてきたのである。しかし、このように漠然とした武士像を前提として論じられてきたものは、鷗外が描いた『意地』三部作における武士像に対して、どうしても究明しにくいのである。なぜならば、各論者が指摘した武士像は、片方の主君か臣下とい視点から見るものからである。しかし、それに対して、鷗外が描いた武士像は、人間関係における主君と臣下という組合の視点から作り上げたものである。従って、片方から見る武士像という視点から、君臣という二人合で築いた武士像を解釈すれば、不十分なものだと考えられる。一方、武士は武士という身分があっても、外界の刺激、感覚や観念を感じ、それが気持ちに影響し、さまざまな感情が生み出すのが人間というものがあるといえよう。人間関係から見れば、互いに影響し合うものである。よって、主君としての権力者は絶対権力があっても、やはり人間心理が作用し、周囲の人

<sup>25</sup>藤本千鶴子（1989）「鷗外における共同体と個－歴史小説集『意地』三部作の構造」『近代文学試論』第 27 号広島大学近代文学研究会 P.14

物、物事に影響されるのである。また、被支配者としての臣下は、権力者に支配されて、服従しても、同じように個人の主張や意識が周囲の人物、物事に影響されるのである。以上のように本来君臣関係においては、支配関係というものが存在するのであるが、この支配関係には権力支配だけでなく、感情支配も含まれるものである。従って、鷗外が君臣関係を中心に描いた『意地』における武士像をも究明するならば、君臣関係に隠された武士の感情を究明することが必要である。

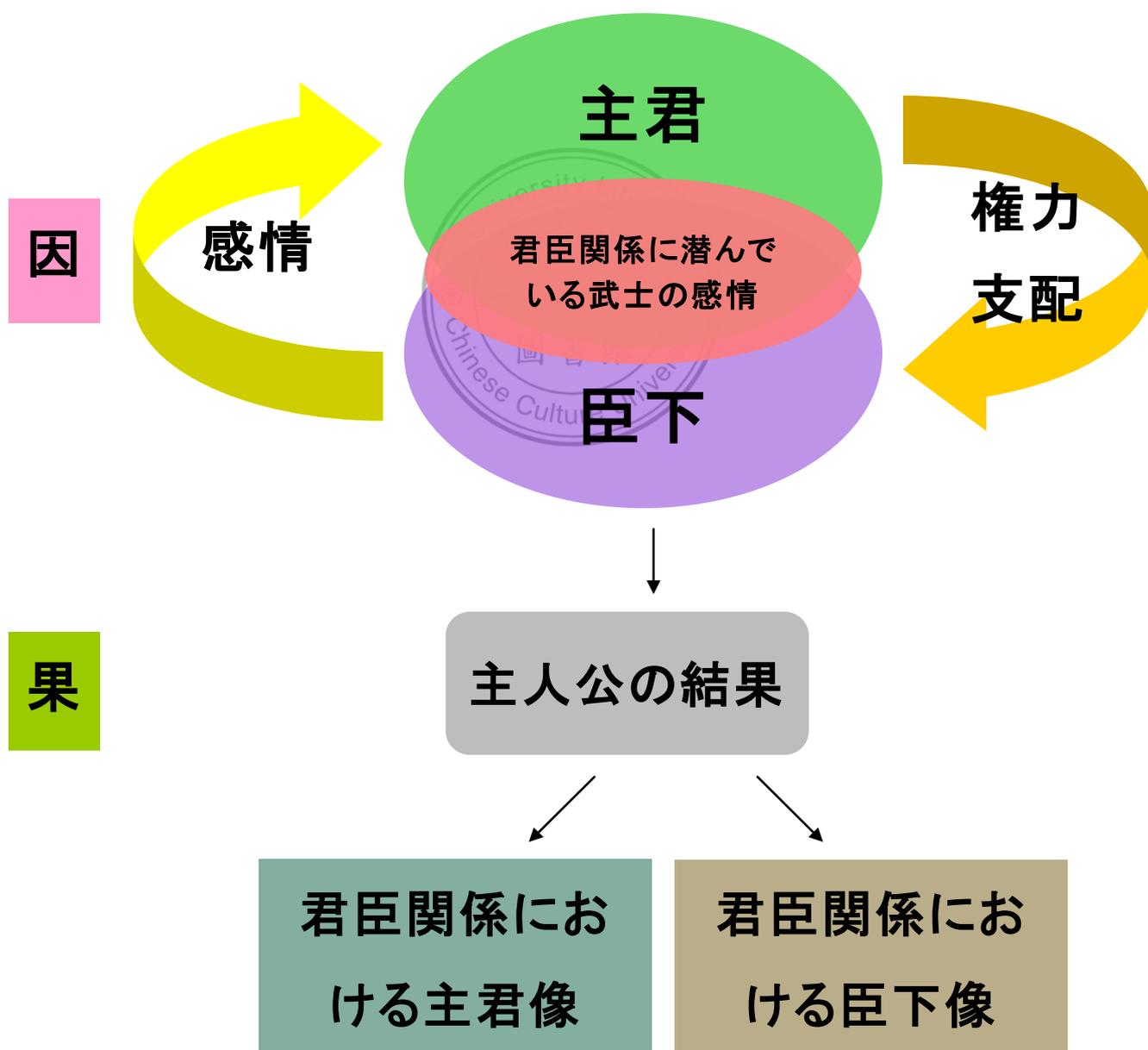
そのため、本論では、『意地』における三部作品を取り上げて、君臣関係における支配関係という視点から、『意地』における武士像を中心に論じて行きたい。この考察を通して、今まで『意地』における武士像に関する研究において、解明できていない部分を補足する一方、鷗外が初期歴史小説である『意地』という第一歴史小説集に作り上げた鷗外の独特の武士像を明らかにする。



### 第三節 研究内容及び方法

本論文では、『意地』に収められた「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」及び「佐橋甚五郎」という三部作を研究対象として取り上げる。また、具体的な研究方法については、君臣関係というテーマに焦点を絞り、主人公と主君との支配関係を中心に、各々の行動原理と個人の意識を考察していく。この支配関係の関連を図1のように整理することができる。

図1 『意地』三部作の君臣関係の支配関係における武士像



以下、各章の研究内容は図1の支配関係に従って、以下のように進める。

第一章では、「興津彌五右衛門の遺書」の主人公興津彌五右衛門と主君三齋公とを取り上げ、君臣関係における支配関係を中心に、各々の行動・行為を考察する。この考察した結果に従って、「興津彌五右衛門の遺書」における武士像を究明する一方、君臣関係に隠された武士の感情をも明らかにする。

第二章では、「阿部一族」の主人公阿部彌一右衛門と主君細川忠利を取り上げ、君臣関係における支配関係を中心に、各々の行動・行為を考察する。そして、殉死事件から生じた後続問題も含めて考察する。阿部家の遺族と主君細川光尚を取り上げ、君臣関係における支配関係を中心に、各々の行動・行為を考察する。この考察した結果に従って、主人公の武士像を究明する一方、君臣関係に隠された武士の感情をも明らかにする。

第三章では、「佐橋甚五郎」の主人公佐橋甚五郎と主君徳川家康を取り上げ、君臣関係における支配関係を中心に、各々の行動・行為を考察する。この考察した結果に従って、主人公の武士像を究明する一方、君臣関係に隠された武士の感情をも明らかにする。

このように、三部作を考察した結果を取り合わせて、今まで『意地』における武士像に関する研究において、解明できていない部分を補足する一方、鷗外が初期歴史文学である『意地』という第一歴史小説集に作り上げた鷗外独特の武士像を明らかにする。

